

小野村資文先生と香散見草

建築学部建築学科 教授 楠 田 一 夫

昭和60年秋に創刊された香散見草は、今年で数えて27年になる。30年近い歳月を経ているが、振り返ってみると意外に短く感じる。今、改めて創刊号の香散見草を眺めていると、当時の出来事が走馬燈のように思い出される。

この香散見草の名付け親である国文学者の奈古忠國先生とは、以前から前総長世耕政隆先生が主宰されていた雑誌「近代風土」の同人としてお付き合いを戴いていた。そのため、お互い気心の知れた中で、創刊の作業を進めさせて戴いたように思う。奈古先生が命名された香散見草は、蔵玉和歌集から選ばれたものであるが、本当に気品のある館報名であると、大変感動したのを覚えている。初代総長の世耕弘一先生が本学の象徴として定められた梅花の奥ゆかしさが、暖かく伝わってくるような気がするのである。私は、この香散見草の表紙のデザインとカットを担当させて戴いた。

当時、近畿大学中央図書館長でおられた、小野村資文先生は、昭和天皇とのお姿が大変よく似ておられたので、皆、陰では小野村先生のことを小野村天皇と言いつつ合っていた。私が小野村先生と親しくお話しさせて戴いたのは、この香散見草の創刊作業の時が初めてであるが、実は小野村先生とは遠い昔、すでにお会いしていたのである。

それは私がまだ本学の学生であった昭和40年頃のこと、教養の授業の中で小野村先生の政治学の講義を受講していた。小野村先生は、教室にはきちっとした三揃えの背広姿で、口髭を蓄え悠々と教壇に立たれていた。私達学生は皆そのような先生のお姿に畏敬の

念を持って眺めていたものである。また先生は、講義の途中でいつも講義の内容とは全く関係のない話をよくされたが、学生達は、密かに今日はどのような話が出てくるのか楽しみであった。

ある時先生は、今日、学校に来る途中の電車の中で、学生が車掌から注意を受けているのを見たと言われた。禁煙と書いてある車内で、悠々とたばこを吸っているのを咎められていたというのである。しかし学生は、車掌にあの掲示板に偽りあり、と抗議していたというのである。車掌はしばらく彼の言葉が理解できず、首をかしげて考えていたようだが、学生は掲示板を指差しながら、あれには「煙を林の如く示せ」と書いてあるではないですか、と言ったそうだ。今では、電車内や公共の場所で、たばこを吸う人は全く見かけなくなったが、私達が子供の頃は当たり前のように喫煙する人が沢山いた。世間はまだまだ悠長な時代であったと思う。小野村先生は、車内でたばこを吸うことはよくないことだと思うが、と前置きされたが、この学生の機知と言うかユーモアと言うか本当に感心したよ。と大笑いしながら話されたのを記憶している。楽しかった授業の思い出の一つである。

さて、話を元に戻して、香散見草がいよいよ出版される頃、小野村館長から私共に食事のお誘いを戴いた。名付け親の奈古先生、図書館広報課のスタッフ2名、そして私の4名が誘い合って料亭に伺った。館長は定刻より早く来ておられて、にこやかに迎えて下さったことを覚えている。食事の時、大変緊張している私に館長は、私の名前、資文と書きますが、これを何と読むか解りますか、とお尋

ねになられた。答えられなくて困っていると館長は正しく読んだ人はあまりいませんがね。と話されながら、資文(もとかた)と読みます。とおっしゃったのを記憶している。確かに難しい読み方である。館長はその2年後の昭和62年に63歳でお亡くなりになられたが、学生時代、最も憧れていた古きよき時代のジェントルマンである。小野村教授にただ1度だけであったが、親しくお話する機会を戴いたこと、私の生涯の良き思い出として、大切に持ち続けたいと思っている。



創刊号 昭和60 (1985) 秋 ほか

